

ぼくとくろちゃんによる

奄美市立屋仁小学校 一年 なかやま そう

一ねんせいになって、はじめてのなつやすみ。ぼくは、かぞくでやにやまにきやんぷにいった。

「おとうさん、あのとりなんていうの。」

「あれは、いそひよどりだよ。」

「おなかがあかくてきれいだね。」

ぼくは、むちゆうになって、むしやとり、どうぶつをさがした。むしやとりは、たくさんいた。でも、どうぶつは、いっぴきもない。

「どこにいるんだあ。」

ぼくがさけんだとき、くさのなかで、かさかさとなにかうごくのがみえた。なんだろうとおもってちかくにいこうとしたとき、

「ごはんだよ。」

とおねえちやんがぼくをよびにきた。くさのなかがきになったけれど、おなかがすいていたので、すぐにみんなのところへはしっていった。みんなでごはんをたべて、はなびをして、たのしいじかんはあつというまにすぎていった。そらには、ぴかぴかおほしさま。

「そろそろ、ねようか。」

おかあさんがいうと、みんなあそびつかれてすぐにゆめのなか。でも、ぼくは、わくわくしていて、すぐにはねむれなかったんだ。

「そういえば、くさのなかには、なにがいたのかな。」

ぼくは、かんがえた。きょうりゆう。ねこ。いぬ。うちゆうじん。もつとねむれなくなってきた。

しばらくかんがえていると、そこからごそごそとおとがきこえてきた。ぼくは、でんとうをもつてこっそりとそとにでてみた。ぼくのりゆくくのよこになにかくろいものがある。ぼくは、ちよつとこわかったけれど、おもいきって、

「そこにいるのは、だれ。」

ときいてみた。すると、くろいものがゆつくりとぼくのまえにやってきた。あまみのくろうさぎだ。

「すごい。はじめてみた。」

おどろいていると、

「わたしは、くろ。たすけてほしいの。だいじなたからがなくたってこまっているの。それがないと、やまのみんながこまるの。」

ぼくは、あまみのくろうさぎがしゃべったことに、もつとおどろいた。でも、それよりもなんだかわくわくしてきた。

「くろちゃん、てつだうよ。たからものつてどんなかた

ちなの。」

「おうかんのかたちをいただいたいやもんどだよ。」

ぼくとくろちゃん、やまのあちこちをさがしながら、いろんなはなしをした。そのたからには、ふしぎなちからがあること。それから、くろちゃんのもだちが、このやまでみたことないきものをみたあとに、たからがなくなっていることにきづいたこと。ぼくたちは、たからがなくなつたばしょにいったみた。ぼくは、たんでいになったみたいに、あしあとをさがした。つちのうえをじっくりみると、おおきなあしあとをみつけた。きつとほんにんのものだ。

「ついていってみよう。」

しばらくあるいていくと、どうくつがあつた。ぼくとくろちゃんは、かおをみあわせてうなずいた。

「はいつてみよう。」

ながいどうくつをでると、みたことがないやまにつながっていた。きやみずがかれて、さびしそう。あれ、かわにぽつとだれかがたっているよ。すぐおおきなろぼつとだ。ぼくたちは、そつとちかづいた。あつ、てにきらきらひかるものをもっている。

「それは、わたしたちのものよ。かえしてちょうだい。」

くろちゃんがさけぶと、

「ごめん。このやまをげんきにするために、どうしても

このたからがひつようだったんだ。でも、やまがげんきにならなくて。」

「そうだったの。そうだんしてくれたらよかつたのに。まほうのことばがあるのよ。」

「ぼく、ろぼ。たすけてくれる。」

「もちろん。グリーンドラングイン。」

くろちゃんがまほうのことばをいうと、つぎつぎにやまがげんきになっていった。きには、みどりいろのはっぱがはえて、かわには、みずがながれだした。ろぼくんなかまもやってきて、みんなでおおよろこびした。

「もうだいじょうぶ。ずつと、やまをだいじにしてね。」

「わかつた。ありがとう。」

くろちゃん、ろぼくんたちは、えがおでやくそくした。なんだかあたりがあかるくなってきた。あきひだ。

「あつ、おとうさんたちがしんばいしているかも。」

ぼくたちは、ろぼくんたちにさようならをして、いそいでもどつた。

やにやまにつくと、

「そうくん、ほんとうにありがとう。また、あえるといいね。」

とくろちゃんがいった。ぼくも、

「どういたしまして。くろちゃんにあえてうれしかった。ぜつたい、また、あおうね。」

と聞いた。くろちゃんは、にっこりわらうと、やまおくへかえっていった。ぼくもかぞくのところへいそいだ。よるのぼうけんのことをはやくはなしたいな。みんなおどろくよね。ぼくもびっくりしたもん。すぐくたのしいぼうけんだったよ。



